



That
Syncing
Feeling

Will Hall

ウィル・ホール

2019

6.1

土
sat



6.16

日
sun

12:00-17:00 土日祝は19:00まで

月曜日・木曜日は休廊



GALLERY

S U U J I N

ギャラリー 崇仁 元崇仁小学校内
| 京都市下京区川端町16 | 京都駅より徒歩9分 |

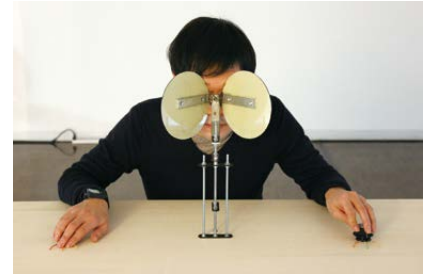
主催 / 京都市立芸術大学 <http://www.kcua.ac.jp/>
企画支援 / 京都市立芸術大学キャリアデザインセンター
問合せ先 / 京都市立芸術大学 事務局 総務広報課 ☎ 075-334-2200



《Diplopiascope》(2017)



《FOVear》(2014)



《Diplopiascope》(2013)

Will Hall ウィル・ホール That Syncing Feeling

この展覧会は、空間的および知覚的経験の詩的な探究です。

人間の知覚プロセスは、意識的に制御できるものではなく、日常の生活で明確に意識されることはありません。脳神経学や知覚心理学の研究によれば、人間が実際に体験していると理解する感覚と、脳が実際に体験している感覚は異なるといわれています。つまり自分で認識している感覚というのは、脳が感じているわずか一部であって、実際は貧弱なものなのです。ある人が「豊かな体験をした」と感じていても、それは実は単なる「大きな錯覚」に過ぎません (Noe, 2002)。だからといって、たとえ自らの知覚経験の貧弱さを認識してそれを補おうとしたところで、実際になにか意識的・自発的にできるものでもありません。

私たちの認識の中にあるこのような欠点に注意を引くことに、どのような価値があるのでしょうか。その行為は無意味なものでしょうか。しかし、その無意味なものの中から意味あるものを得ようと向き合うことで、日常の知覚的存在の表面下にあるものが見えてくるのではないのでしょうか。



作家プロフィール

- 1980 イギリス生まれ
- 2003 バルセロナ大学 留学[エラスムス交換留学制度]
- 2004 グラスゴー芸術大学芸術学部絵画学科 卒業
- 2010 鹿児島大学教育学部美術科研究生 修了
- 2012 京都市立芸術大学美術研究科修士課程絵画専攻造形構想 修了
- 2015 京都市立芸術大学美術研究科博士課程メディアアート専攻 修了
- 現在 宮崎国際大学 講師

ウィル・ホール [Will HALL]

展示歴

個展

- 2014 Dissoception(ギャラリーアンテナ/京都)
- 2017 Will Hall(NO00 KITTY Gallery/大阪)
- 2017 Vision #1(愛知淑徳大学/名古屋)

グループ展

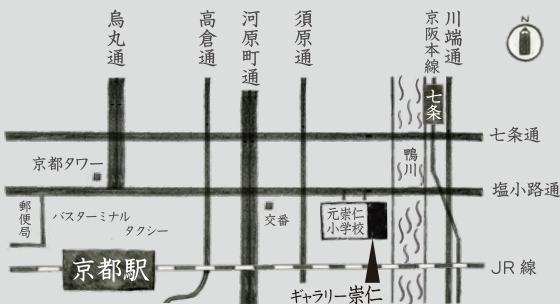
- 2004 BraveART(London/U.K)
- 2005 Will Hall and Billy Teasdale(Transmission Gallery/Glasgow, U.K)
- 2010 Revelers thought the flames were part of the show(本学内 小ギャラリー)
- 2012 京都市立芸術大学 作品展(京都市美術館)
- 2012 Synesthesia—Colors of KCUA(@KCUA)
- 2014 博士展(@KCUA)
- 2018 ArtSci(ETH/Zürich, Switzerland)

賞歴

- 2012 京都市立芸術大学 作品展 市長賞



京都市立芸術大学移転整備プレ事業
《教室のフィロソフィー》第10弾 展覧会情報
ウィル・ホール 『That Syncing Feeling』
http://www.kcua.ac.jp/event/20190601_willhall/



ギャラリー 崇仁 元崇仁小学校内 京都市下京区川端町16



JR 京都駅中央口より徒歩 9分
地下鉄烏丸線京都駅ポルタ A3出口より徒歩 7分
京阪七条駅 1番出口より徒歩 6分
※お車でのご来場はご遠慮ください。

小学校の職員室であった空間が本学学生の設計・デザインによりギャラリーに生まれ変わりました。

京都市立芸術大学では移転整備プレ事業として、この新たな展示空間「ギャラリー崇仁」において若手作家を支援するためのプロジェクト「教室のフィロソフィー」を実施しています。このプロジェクトでは、本学を卒業、あるいは大学院を修了した若手作家を、小学校解体までの2年間、連続して紹介していきます。絵画・彫刻・デザイン・工芸等様々な専攻で学び、新たな表現を生み出そうと苦闘している作家たちが生み出した作品群からは、現代の新しいアートの息吹を感じていただけのことと思います。



この町と、これからも、この町と、いつまでも。

